

## 銀座通連合会による都市空間整備に向けた運動の展開

- 戦前から戦後への問題意識と空間像の継承に注目して -

A STUDY ON DEVELOPMENT OF MOVEMENT FOR URBAN DESIGN  
BY GINZA STREET ASSOCIATION, TOKYO

- Focusing on a succession of awareness of the issues and the image of spaces from pre-war to post-war -

宮下 貴裕\*<sup>1</sup>, 中島 直人\*<sup>2</sup>

Takahiro MIYASHITA and Naoto NAKAJIMA

The purpose of this paper is to reveal history of movement for urban design by proprietors of stores in Ginza from 1930's to 1960's. We pay attention to Ginza Street Association: store association has been composed of proprietors of stores along Ginza Street. They have continued to argue what to do to make future vision of Ginza Street come true for a long time; and awareness of the issues of urban space in 1930's were passed to movement in post-war even though most buildings were burnt down by air raid in 1945. Then main purposes of movement: removal of telegraph poles and abolition of tram were achieved in 1960's.

**Keywords :** *Ginza Street, Ginza Street Association, Store Association, Movement for Urban Beauty, Urban Design*

銀座通り, 銀座通連合会, 商店会, 都市美運動, 都市空間整備

## 1. はじめに

東京都中央区に位置する銀座通り(国道15号)は商業地銀座のメインストリートとして知られ、新橋から上野まで南北に伸びる中央通りの銀座1-8丁目部分を指して呼ばれる名称である。1872年に発生した銀座大火を契機として建設された銀座煉瓦街以降の歴史においては、様々な様式の近代建築や街路空間整備による近代的都市空間の形成、百貨店の進出や商店街の成長による繁華街としての発展などから銀座におけるモダン都市文化の中心として捉えられることが多く、これまでも建築史、都市史、風俗史などの様々な観点から研究の対象とされてきた。銀座通りの都市空間に関する研究に注目すると、藤森照信は建築史の観点から明治期に国家事業として展開された煉瓦街の建設に関する研究に取り組み、煉瓦街建設に向けた明治政府による計画立案の展開や設計を担当した建築技師ウォートルスの設計思想などを明らかにした<sup>1)</sup>。また明治から昭和初期にかけて様々な建築家によって展開された銀座通り沿道における開発の歴史や、そこで取り入れられた建築様式の変遷に関する論考も発表している<sup>2)</sup>。初田亨は近代日本における繁華街の形成史という観点から、銀座における明治から昭和初期にかけての近代建築の展開や都市機能の変遷について明らかにしている<sup>3)</sup>。岡本哲志は江戸時代から現代までの銀座における敷地割や土地所有の変遷を明らかにし、各時代において展開された建築行為の方向性との関係を考察している<sup>4)</sup>。これらの研究では各時代における銀座通りの空間像が

それぞれの建築の集合として描かれており、開発者による様々な建築行為や多彩な設計思想の蓄積と変遷から紡がれた都市形成史と捉えることができる。関東大震災や東京大空襲によって二度焦土と化し、空間のコンテクストの断絶を経験しながらも、その度に多様な開発や活発な商業活動の展開によって近代的都市空間とモダンな都市文化が生み出されてきたことが明らかにされている。

これに対し本研究では、それらとは異なる主体として銀座通り沿道に店舗を構える地元商店主に注目する。銀座通りには地元の商店や企業が加盟する団体として1919年に設立された商店街組織・銀座通連合会がある。設立当初の名称は京新聯合会で、東京市議会において銀座通りの街路樹であるヤナギを別の樹種に植え替えようとする動きが生まれていたことに抵抗することが設立の目的であったとされている<sup>5)</sup>。1930年に実施された銀座の町名再編を機に銀座通連合会と改称し、1950年には銀座通りと直交する晴海通りの商店街組織・銀座中央通会と合併して現在に至っている。銀座1-8丁目の各町から選出される理事には歴史的に銀座を代表する商店や企業の代表が名を連ね、豊富な資金力と強力な発言力を背景に、独自の構想立案や行政当局などに対する働きかけなどを通して自らが求める空間像の実現に向けた運動を展開してきた。既往研究では中島直人がわが国で展開された「都市美運動」を論じる中で同会が1930年代に取り組んだ運動の存在に触れている<sup>6)</sup>が、これまでその歴史の詳細が明らかにされることはなかった。よって既往研究では触れ

\*<sup>1</sup> 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻  
博士後期課程・修士(政策メディア)

\*<sup>2</sup> 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授・工博

Doctoral Student, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering,  
University of Tokyo, M.Media and Governance

Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, University  
of Tokyo, Dr.Eng.

られてこなかった地元商店主という主体に注目してその運動の展開と変遷を明らかにすることは、銀座通りの都市空間がもつ歴史的文脈を見出すうえで大きな意義を有していると考えられる。

## 2. 研究の目的

商店街組織が設立された 1919 年以来、地元商店主らは沿道の建築物のみならず銀座通りの街路空間に対して高い関心を示してきた。戦前期には、関東大震災の復興に関する独自の構想立案などを経て、復興建築によって新たな街並みが形成されるようになった 1930 年代に入ると、東京オリンピックの開催が予定されていた 1940 年に向けた大規模な都市美運動に取り組むようになった。ここで銀座通連合会は電柱の撤去や市電の廃止に向けた運動、「銀座改造 10 ヵ年計画」の立案などを行い、専門家とも連携しながら彼らが共有する空間像の実現を目指した。これらの運動は戦時体制下において 1938 年以降下火となり、1945 年の東京大空襲では銀座通り沿道の建物の大部分が焼失するなど大きな挫折を経験するが、戦後になると運動が再開され、1960 年代には電柱の撤去や都電の廃止、歩道の御影石舗装などを実現させた。そして当時銀座通連合会内部で展開された議論に注目すると、戦前期に共有されていた問題意識や空間像と共通する点が多く見られた。路面電車の廃止や歩道の拡充などは当時国や地方自治体によって展開された全国的な潮流であったが、現在の銀座通りの骨格を生み出した 1960 年代の空間整備には戦前期から継承された地元商店主らの問題意識や空間像を反映したものであるという歴史的意義が存在すると考えられる。

そこで本研究では戦前から戦後にかけて共有された銀座通りの都市空間に対する問題意識や空間像に注目し、それらの各時代での変化を分析することで、地元商店主らによる都市空間整備に向けた運動の連続性を明らかにする。これによって銀座の都市形成史に関する既往研究で注目されてこなかった共同体による運動の歴史的意義を考察するとともに、空間のコンテクストの断絶を指摘するこれらの研究とは異なる新たな歴史の文脈を見出す。

## 3. 研究の方法

本研究では銀座通連合会の運動や内部における議論の展開を明らかにするため、同会所蔵の内部資料や刊行物を活用した。まず戦前期から作成されている資料として 1936 年から現在までに 200 冊近く作成されている新聞記事スクラップブックがある。ここには銀座通連合会の活動を報じた記事が多数収集されており、その網羅性は不明瞭であるものの、戦前から戦後にかけての運動の概観が把握できる。最初に収集された記事は 1936 年 8 月 29 日付の東京オリンピック関連記事で、同じく 1940 年に東京での開催が予定されていた皇紀 2600 年記念行事や日本万国博覧会に関する記事も多く収集されていることから、当時の銀座通連合会が 1940 年という年を大きな目標として見据えていたことがわかる。また戦後における運動の内容を把握できるものとしては同会常務理事会の議事録や会員向けに発行されていた「銀座通連合会会報」、行政当局に対して提出された陳情書といった内部資料があり、1959 年からのものが現存している。常務理事会は会長・副会長と複数の常務理事によって構成される銀座通連合会の意思決定機関で、ここで取り組むべき運動の方針が決議され陳情書等もそれに基づいて作成されていたことから、こ

Table1 Materials owed by Ginza Street Association.

<p><b>1. Scrapbooks owed by Ginza Street Association (1936 - )</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ News of Tokyo Olympic Games, Japan EXPO and memorial events of 2600 years</li> <li>○ News of movement for urban design and festivals by Ginza Street Association</li> <li>○ News of events in Ginza (Changes of urban spaces and trends of commercial activities)</li> </ul> <p><b>2. Bulletins of Ginza Street Association (1959 - )</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ Reports of movement by Ginza Street Association</li> <li>○ Claims to local governments (Urban development and legislation)</li> </ul> <p><b>3. Records of the board of governors (1959 - )</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ Arguments and opinions for urban design in Ginza</li> <li>○ Contents of resolutions on movement</li> </ul> <p><b>4. Petitions to local governments (1959 - )</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ Claims and requests on urban design</li> </ul>
---

これらの資料をあわせて分析することで、組織の内部における議論や運動方針の決定、そして行政当局等に対する働きかけといった一連のプロセスを明らかにすることができる。

## 4. 1930 年代における銀座通連合会の都市美運動

### (1) 運動の開始と都市美協会への呼びかけ

1933 年 7 月、銀座通りの地下では浅草—京橋間を結んでいた東京地下鉄道（現 東京メトロ銀座線）の延伸工事が実施されていた。その中で銀座通連合会は地下鉄工事とあわせて銀座通りに乱立する電柱を撤去し電線の地中化を行うことを内務省や東京市の技師らによって構成される団体・道路研究会に提案した。道路研究会はこの案に対して賛意を示し、都市美協会や交通協会、道路改良会といった団体にも賛同を求め機運の高まりを期していくこととなった<sup>7)</sup>。この動きの中心を担っていたのは当時銀座通連合会副会長であった保坂幸治で、以降市当局や関係省庁などへの陳情に度々外向き、新聞や雑誌といったメディアでも積極的に発言していくことになる。当時の新聞は「真黒なコールタールに塗りつぶされた醜い電柱だけが、明治時代と少しも変らぬ姿で無作法に突っ立ち、これは『日本の社交場』を誇るモダン銀座を傷つけること甚だしい」という認識が地元商店主らの間で共有されて生まれた動きであると報じた<sup>7)</sup>。

これに対して前向きな反応を見せたのは都市美協会であった。都市美協会は都市研究家の椽内吉胤らが中心となって 1925 年に設立された都市美研究会を前身とする運動団体で、建築家や研究者をはじめ、石原憲治や井下清など東京市職員も多く参加しており、1934 年 2 月 17 日に行われた総会において電柱の撤去に向けた運動を開始することを決議した<sup>8)</sup>。当時の都市美協会は東京市の土木局内に事務所を構え、市の職員が団体の運営業務を行うなど市の外郭団体としての性格が強くなっており<sup>9)</sup>、電柱の撤去という案は市当局の中でも現実味のあるものとして認識されていたと考えられる。

そして都市美協会と接近することになった銀座通連合会は、1934 年 5 月 16 日に都市美協会の石原憲治と井下清（市公園課長）、市土木課員らを招いて「銀座舗装座談会」を開催した。これは銀座通りにおける地下鉄工事の完了に伴い市が近く銀座通りの再舗装に着手すると考えた銀座通連合会が、電柱の撤去に先立って市当局関係者と新たな歩道舗装のあり方について議論することを目的に開催したものであり、この会合において市当局側は地元からの出資があれば歩道の再舗装を実施する用意がある旨を伝えている<sup>9)</sup>。当時銀座通連合会の内部では歩道の大理石舗装化が構想されていたが、現実的な決定として同年のうちに銀座通りにおける 6—8 丁目部分の歩道



Photo1 Ginza Street where telegraph poles were standing in 1935. Ginza Street Association recognized that telegraph poles were abuses for "Urban Beauty".  
(Owed by Ginza Street Association)

においてコンクリート平板による舗装が実施されることとなった。

## (2) 東京オリンピックを見据えた運動方針の決定とその空間像

電柱の撤去を求める運動を皮切りに銀座通りにおける都市美の実現に向けた取り組みへと着手した銀座通連合会であったが、その後の運動の展開や都市美協会との関係性などについては明らかでない。しかし東京オリンピックと日本万国博覧会が皇紀 2600 年を迎える 1940 年に開催されることが 1936 年 7 月に決定すると、東京における都市空間整備や都市美実現の必要性が新聞などのメディアで盛んに叫ばれるようになり、銀座通連合会の運動についても多く報じられるようになった。銀座通連合会は 9 月 10 日の理事会で 1940 年に開催される国家行事に合わせて実施する街頭装飾のための「銀座装飾積立金」に着手することを決定し、同時に「付帯する諸案」として電柱の撤去と銀座通りを走る市電の廃止に向けた運動に取り組むことを決議した<sup>10)</sup>。これによって電柱の撤去と市電の廃止が 1940 年に向けた運動の最重要目標として設定された。

当時の地元商店主らの間では、銀座通りの都市空間や銀座という街のアイデンティティに関する議論において、オリンピックに訪れる外国人に対して誇ることのできる街並みを生み出していくべきという視点が多くを占めるようになっていた。このような問題意識は 1936 年 6 月 1 日に時事新報社主催で開催された「帝都の『顔』を語る座談会」における議論からうかがい知ることができる。この座談会には銀座通連合会会長の富澤半四郎や副会長の保坂幸治、前会長の吉田幸次郎など同会の会員 22 名が参加し、銀座通りの進むべき方向性について議論を交わしている。ここでは都市美運動の最重要目標であった電柱撤去と市電廃止の必要性が主張された他、目指すべき空間像として歩道が広く、緑が多く植えられ、歩きながらショーウィンドウを眺めて楽しむことができるというイメージが共有され、「プロムナード」という言葉で表現された。そして銀座通りの現状はパリのショーウィンドウやニューヨークのネオンと比較して非常に劣っており、一層の充実が必要であると指摘された<sup>11)</sup>。

しかし欧米の都市を理想としたこのような空間像が共有される一方で、日本を代表する繁華街として来街者に日本的な印象を与える街並みを目指すべきという共通認識も存在していた。当時の銀座通りでは関東大震災からの復興において本建築の建設が進み、歴史主義やアール・デコをはじめとして表現派、モダニズムなど多様な建

築様式のビルが建ち並んでいた<sup>12)</sup>が、座談会の出席者はこのような街並みに対して「外国の大都市のイミテーション」「どこの国だかわからない」と厳しい評価を下している<sup>13)</sup>。「日本の銀座」「国粹的銀座」と座談会内で呼ばれたこの視点は外国人の来街者の増加が見込まれる 1940 年を見据える中で生まれたものであるとともに、「日本の古城の様な建築様式を加味する」など当時わが国で流行していた帝冠様式にも通ずるものであった。このように 2 つの異なった空間像が並行して共有されるという状況はそれまでにはなく、都市美運動に取り組む中で生み出された新たな方向性であったと言える。

## (3) 日本都市風景協会との連携による運動の展開

1936 年 10 月、銀座通連合会は理事会で決議した運動方針に基づき、東京市長や市電気局長、市議会議長らに対して市電の廃止を求める陳情書を 301 人の署名や市電の代替ルートに関する私案とともに提出した<sup>14)</sup>。その内容は以下のようなものである。

「銀座通連合会は町会各員相寄り相協力してここ四年間に銀座を改装整備して『帝都の顔』として恥しからざるものたらしむべく決定し、その実現に邁進の覚悟に御座候。即ち建築様式の改装促進、電柱の撤去、看板広告類の整理統一等は勿論、ショーウィンドウの改造、店頭装飾の諸研究、照明その他店内陳列の改革、露店の美化統制を図る等その主たるものに有之候。」

「銀座の如く比較的幅員狭く繁華を極める街路にては路面電車の運行は徒らに喧騒と交通障害をもたらすこと多く、ポール架線等錯綜して都市美を害することまた少からず候。殊に今日の如く交通整備発達し自動車、バス、地下鉄等容易に利用し得る時代においては、路面電車存置の必要なべく交通の防止、都市美の助長、市街の繁栄のためにも是非撤廃致し度候。」

陳情書の中では 1940 年に向けて取り組むテーマが表明され、市電廃止の意義が交通の観点と都市美的観点の両方から述べられた。しかしこれに対する市当局の反応は芳しくなく、陳情の状況を報じる新聞記事には市電気局の見解として「現在でこそ自動車、乗合自動車、地下鉄等の交通機関が発達したから路面電車の必要が薄らいだが、数年前までは市電が最も銀座のお客を輸送していたのにその功績恩顧も忘れて今更自分勝手な要求をするのは片腹痛い」と不快感を表す談話が掲載された<sup>15)</sup>。電柱の撤去が市当局の中で現実的な施策として認識され、内務省においても本格的な検討が行われるようになっていたのに対し、市電の廃止に関しては乗車料金が市の貴重な税収となっていたこともあり市当局の態度は消極的であった。

このように市電の廃止に向けた運動は進展の見込みがない状況にあり、電柱の撤去に関して共同歩調をとっていた都市美協会も市電の扱いに関する決議は行っていない<sup>16)</sup>。そこで銀座通連合会は運動を進めていく上での新たな連携相手として日本都市風景協会（以下都市風景協会）に注目した。都市風景協会は市の影響力の増大に反発して都市美協会を脱会した椽内吉胤によって 1935 年に設立された新しい団体で、設立発起人に名を連ねた人物も長谷川如是閑（ジャーナリスト）、川路柳虹（詩人）、岸田日出刀（東京帝大建築学科教授）ら民間人がほとんどであった<sup>17)</sup>。銀座通連合会としては市電廃止の実現を含めた都市美運動の展開に突破口を見出すため、在野の運動団体である都市風景協会との連携を模索したのであった。また椽内個人としても 1931 年に新聞の連載において「銀座をもつと



Photo2 A noise survey at Ginza Street on Dec. 19, 1936.  
The person on the extreme right is Yoshitane Tochinal.  
(Owed by Ginza Street Association)

散歩道らしくするには、先づ厄介な電車や電柱を撤去し、建物その他の設備を追々と散歩道らしいものに改めてゆけば一層いい」と主張する<sup>13)</sup>など、以前から銀座通りにおける市電廃止の意義を主張しており、同じ問題意識が両者で共有されたと考えられる。

そして両者は合同の運動体を「銀座検察隊」と名付け、11月24日に銀座通りの視察と座談会を行った。座談会では視察の結果を踏まえて都市風景協会側から「建物が和洋折衷で統一感がないため洋風建築に改めるべき」「ヤナギは貧弱なため他の樹種に植え替えるべき」など11の項目からなる提言がなされた<sup>14)</sup>。そして市電の廃止と電柱の撤去を最優先目標に掲げ共同で運動を展開していくとの決議文を作成し、両者の連名で市当局に対して陳情を行っていくことで合意した。さらに12月19日には銀座検察隊として銀座通りにおける騒音調査を実施し、市電の走行がどの程度の騒音を生み出しているかを検証した。都市風景協会会員であり音響工学を専門とする建築家・佐藤武夫が持ち込んだ騒音計を銀座通り沿道4ヶ所に設置して実施されたこの調査では、通常45デシベルの騒音に対して市電走行時は65デシベルとなることが明らかになり、歩行者の精神状態に悪影響を及ぼしているという結論が下された<sup>14)</sup>。

このように銀座通連合会と都市風景協会は1940年に向けた都市美運動において共同歩調をとったが、銀座通りの現状に対する評価や目指すべき空間像に関して認識の相違も見られた。前述したように当時の銀座通連合会では欧米の都市を模範とした「プロムナード」としての銀座通りを目指す方向性ととも、海外からの来街者に対して日本的な印象を与える街並みを創出するべきとするもう一つの視点が共有されていたが、都市風景協会は日本の情緒を生み出す和風建築や街路樹のヤナギは排するべきと考えていた。このような主張は11月24日の座談会において表明され、特に椽内が生長不良に陥っているヤナギは街路樹として不相当であると強く訴えた。当時の街路樹であったヤナギは1932年に東京朝日新聞の寄贈によって植樹されたもので、1920年に実施された道路改修においてヤナギに代わって植樹されたイチヨウが生長不良であったことから、銀座通連合会が中心となってヤナギの再植樹を求める運動を展開し実現を果たしたという経緯が存在した。椽内はこの再植樹が行われた際にも決定に反対する旨の主張を展開しており<sup>15)</sup>、座談会では新たな街路樹として「近代都市のメイン・ストリートを飾るには銀杏こそ理想的」とイチヨウの再植樹を提案している<sup>16)</sup>。これに対してかつて

ヤナギの再植樹に向けた運動に取り組んだ銀座通連合会側からは、副会長の保坂が、

「街路樹としては柳では駄目といふことは判りました。(中略)今後電車や電柱が撤去された場合には専門家の意見も聞き日本の代表的銀座に応はしい樹木が選定されるべきです。柳祭といつたのもも一種の宣伝的祭で実際の根拠がある訳でもないのです。私等は銀座の功労者創設者といった人々を尊敬するお祭りといったものに替るべきではなからうかと考へてみます。」

と述べてヤナギの撤去に応じる姿勢を見せ<sup>16)</sup>、1932年の再植樹を契機として始まった「柳まつり」の名称変更まで唆した。彼らがヤナギの撤去を容認したことには、都市風景協会側が後継街路樹の候補としてイチヨウを挙げ、わが国に古くから存在する樹種であるという日本的性格の強さを強調したことが大きく影響し、実際に翌年4月にはそれまでの柳まつりから「銀座まつり」と名称を変えた新たな行事が開催された。しかし1937年に入ってヤナギの生長状況が好転したことから、銀座通連合会は同年6月に都市風景協会と共に開催した座談会の席でヤナギの存続を提案した。この座談会で相談役の玉木彌月はヤナギの状態に関して「現在の柳のままでよろしいとは思つてゐない」としつつも、「日本人らしい情緒があるので、パリのマロニエのやうに外國人が来て銀座の柳はよいと向ふへ帰つて印象に残ると思ふのです」と主張し、副会長の保坂も「どうか柳は銀座の付き物として御賛成をして戴きたいのです」と発言している<sup>17)</sup>。銀座通連合会は街路樹を「日本の銀座」を目指すうえでの重要な要素として認識しており、前年は日本的性格が強いとされたイチヨウを採用することを条件にヤナギの撤去を受け入れたが、生長状態の好転によって、より馴染みの深いヤナギの存続を訴えるようになった。このことから当時の銀座通連合会ではヤナギそのものへの愛着以上に、街路樹のもつ日本的性格に対して大きな価値が見出されていたと考えられる。そしてこの座談会において椽内を除く全出席者の賛意を得て、ヤナギを撤去するという方針は白紙化された。

#### (4) 銀座改造計画の発表と都市美運動の終焉

1937年1月、銀座通連合会は10年という中長期的視点から、電柱の撤去と市電の廃止を実現した後に取り組むべき課題も含めた銀座改造計画を発表した。その構想の概要は以下の通りである<sup>18)</sup>。

- ① 電柱が撤去されて見通しが良くなった銀座通りにおいてバラック建築から本建築への建て替えを進め、美観を誇る繁華街とする
- ② 路上全てを歩行者空間として整備し銀座通りを「社交街」とする
- ③ 市電の廃止とともに通過交通としての自動車の通行を禁止する
- ④ 昼間の一定時間はバス以外の自動車の通行を禁止し、人出の多い時間は完全な車両通行禁止とする
- ⑤ ロータリー式の小公園を各街区の路上に整備し、芝生や小樹木で空気の清潔を保つ

この構想は前年11月に開催された銀座検察隊の座談会において都市風景協会が行った提言とは異なった内容となっているが、1936年12月に東京日日新聞主催で行われた「明日の京橋区を語る座談会」において、出席者の保坂が建物の最低高さを定めるという都市風景協会の主張を述べていたことから、彼らの見解が銀座通連合会内の議論に対して一定の影響を与えていたことは事実であると考えられる。なお中長期計画であるこの構想の中に、変更する方針を決

めた街路樹に関する記述は存在しないが、4月に開催される銀座まつりについて報じる同時期の新聞記事では、柳まつりからの名称変更は銀座通連合会のヤナギと決別する意識の表れであると報じられていたことから、この段階でヤナギの撤去を容認する姿勢に変化は見られなかったと考えられる。その後の展開としては市電の廃止に向けた運動がなおも難航する一方、電柱の撤去に関しては市当局や電柱・街路灯を管理する東京電燈と継続的に協議が進められた。そして1937年2月に銀座通連合会が工事費のうち6万円を負担することで合意が成立し、これによって同会が都市美運動の柱の一つに据えていた電柱の撤去の実現が現実味を帯びることとなった。

しかしこのような機運は1937年における日中戦争の勃発や政府が打ち出すようになった商店法をはじめとする統制経済政策によって大きくしぼんでしまう。商店法は飲食店を除く業種の商店が22時以降に営業を行うことを禁止するもので、これが施行されれば銀座をはじめとする繁華街は大きな打撃を受けることが予想された。またこの法律では地方長官に「盛り場」として認定された地区において特例として23時までの営業が認められるとされたため、銀座通連合会はその特例を受けるための運動に取り組みなければならなくなった。よってそれまで継続して行ってきた都市美運動は中断せざるを得なくなり、盛り場認定のための運動も結果的に東京市内では浅草六区のみが認定されることになり失敗に終わった。

それでも合意に至っていた電柱の撤去に関しては市議会で審議が進められ、1938年5月17日には撤去案が市議会本会議を通過し実施が確実なものとなったが、翌月になって大蔵省が市の起債を削減したことで一転して中止に追い込まれた<sup>19)</sup>。この時期には戦時体制への移行に伴って統制経済がより強化されるようになり、同年7月には節電を目的として定められたネオン街新取締規則に則り銀座における全てのネオン消灯が実施されるなど、都市美の実現に向けた空間整備を求める状況ではなくなっていった。その一方で都市風景協会とのつながりに関しては、1940年1月27日に実施された都市風景協会主催の「銀座通りの紙屑の考現学的調査」に保坂らが参加し、同年4月に発行された都市風景協会の雑誌『都市風景』の「銀座特集号」には「後援」として銀座通連合会の名が記され会員名簿が掲載されるなど、良好な関係性が維持されていたと考えられる。特に都市風景協会の会員では数少ない役人であった石川栄耀とは強いつながりが存在したと考えられ、保坂が会長となって1941年に立ち上げられた銀座通照明研究会の発会式では石川が講演を行い、同年に開催された商店街戦時協力週間の「消費者の声を聞く座談会」にも保坂と石川が揃って出席している。

## 5. 戦後に展開された都市空間整備に関する運動

### (1) 戦災復興に向けた取り組みと道路管理の実施

銀座は1945年の東京大空襲によって大きな被害を受け、銀座通り沿道の建築物はその大半が焼失した。しかし終戦を迎えると銀座通連合会は商店街の復興に着手し、12月には東京都都市計画局に対して電柱の撤去、都電の廃止、街路樹のヤナギからイチョウへの変更、建物高さの最低限度規定の導入といった内容が盛り込まれた独自の銀座復興計画を提出した<sup>20)</sup>。銀座の大部分が焦土と化した状況で策定された計画であったが、その内容は1930年代の運動において議論されたテーマを引き継いだものとなっており、都市風景協会

からの提言に見られた街路樹の変更や建物高さの最低限度規定の導入も銀座通連合会の構想として組み込まれた。また当時銀座通連合会会長の職に就いていたのは1930年代に副会長として都市美運動の推進役を担った保坂幸治(在任期間1939年-1963年)であり、幹部の顔ぶれも戦前期からの連続性が存在していた。ここで描かれた空間像に注目すると、電柱の撤去や都電の廃止といった従来の主張に都市風景協会の提言内容も加えられ、先述した2つの空間像のうち「プロムナード」を志向する視点が強調されている。その一方で日本的性格の強い街並みを創出すべきとする記述は見当たらず、「日本の銀座」という視点は、少なくとも空間整備の手法においては重視されなくなっていることがわかる。

実際に銀座通連合会が戦災復興期に実施した銀座通りの都市空間に対する取り組みとしては歩道空間の整備が挙げられる。終戦まで銀座通りは東京都の管理下にあったが、戦災復興期には同会が実質的な管理主体となっており、1949年には費用の半額を負担してコンクリート平板による歩道の舗装を実施した。そして1950年には戦前から交友のあった石川栄耀らを審査員に招いて新たな街路灯を決めるコンペを開催し、その翌年に最優秀作品として選出されたデザインによる街路灯の整備が全額負担のうで行われた<sup>21)</sup>。

### (2) 銀座改造案の策定とオリンピックを目標とした運動の展開

1955年12月、銀座通連合会は都電の廃止に向けた運動に再び着手することを決定した<sup>22)</sup>。これは東京都が損傷の激しい銀座通り歩道の再舗装を実施したことが契機となって生まれた動きで、銀座通連合会加盟店を対象としたアンケート調査で8割以上が都電の撤去に賛成したことから本格的な運動に取り組みすることとなった。当時銀座通連合会は都電廃止後における銀座通りの空間像として、歩道を拡げ植樹帯を車道に沿って創出するというイメージを描いていたが、東京都が都電の廃止やさらなる街路空間整備に取り組むことはなかった。そこで銀座通連合会は銀座通りの空間整備に対する社会の関心を高めることを目的として、1957年に銀座通りの整備案に関する懸賞論文の募集を行った。これには273点の応募があり、都市社会学者・磯村英一や建築家・谷口吉郎ら9名の審査員によって入選案が選出された<sup>23)</sup>。そして1958年6月6日の銀座通連合会定時総会において、それらの入選案を磯村が総合的に取りまとめたものが銀座通連合会の運動方針として採択された。その基本方針は「都電の廃止と電線の地中化による街路空間の整理」と「建物の高さ統一と共同建築の建設」で、会長の保坂は雑誌の論考の中で5年間での実現を目指すことを表明している<sup>24)</sup>。そして1959年10月21日には銀座に店を構える商店主や有力企業の経営者によって組織される「銀座美化促進連盟」「銀座文化協会」との連名で建設大臣や都当局などに対して都電の廃止を求める以下のような陳情書を提出した<sup>25)</sup>。

「都心部における交通不安の増大は日を追って激化の一途をたどっており、その対策を樹立しなければならない。(中略)その第一着手として路面電車の撤去をお願いしたい。」

「オリンピックを4年後に控えるなかで世界の銀座として知られる銀座に歴史的遺物たる路面電車を存続させることは首都の恥であり国の恥である。」

そして1961年2月にも同様の陳情書を提出し、これを受けた東京都は交通委員会において都電の是非に関する審議を行ったが、3

月 17 日に「趣旨は理解できるものの時期尚早」として決定を棚上げし不採択となった<sup>26)</sup>。都電と同じく銀座通りに沿って運行している地下鉄銀座線だけでは輸送力に限界があり、依然として都電の必要性は高いというのが都の主張であった。

その一方で銀座通連合会は銀座通りの街路空間整備に向けた取り組みとして、道路を管理する建設省国道工事事務所と新たな歩道の舗装の実現に向けた協議を進めた。1963 年 8 月には建設省一級国道課長や建設省国道工事事務所などに対して歩道の再舗装を求める陳情を行い<sup>27)</sup>、東龍太郎都知事との会談や国道工事事務所との協議を経て、翌年に控えた東京オリンピックまでの再舗装実施の確約を得た。当初銀座通連合会は新たな舗装に御影石を利用することを望んでいたが、その場合は銀座通連合会側が 2 億円を負担する必要があるとの回答を受けたことや、完成後における掘り返しが困難となることなどから断念し、カラーアスファルトによる舗装を実施することで合意した<sup>28)</sup>。カラーアスファルトの色彩の決定権は銀座通連合会に与えられ、服飾デザイナーで日本デザイナー協会理事長でもあった木村四郎常務理事が銀座通り沿道の建築物や歩行者の服装の色彩との調和という観点から「ビジョン」(グレー系統)の採用を決定した。そして工事はオリンピック前の 8 月 24 日に完了し、あわせて旧舗装のタイルによってハイヒールを傷めた歩行者に対し新しいハイヒールを贈呈する「歩道完成靴まつり」が開催された。

オリンピックの開催は戦前期と同様、地元商店主らの都市空間整備に対する関心を高めることにつながり、同じく路面電車の廃止や電柱の撤去が運動の中心的テーマとなった。そして銀座通連合会の会員に向けた発行された会報では「アメリカ式のギンザでもない、フランス式のギンザ ダメ、日本のギンザに世界中の人が集ってくる日がもう近い」と、銀座は日本を象徴する街であるべきとするコピーが掲載された。しかし日本趣味を前面に押し出した街並みを目指すべきという視点はここでも提示されず、「プロムナード」を志向するもう一つの方向性の延長として、御影石舗装や植樹帯を求めるといった視点が見出されたと捉えることができる。

### (3) 祝祭空間としての銀座通りの模索と大規模改修

1963 年 12 月 8 日に行われた常務理事会で、木村が近い将来に銀座通りで車両通行止めを伴う大規模行事を開催したいとの提案を行い、オリンピック終了後の 1965 年 1 月には、木村が委員長を務めていた「銀座オリンピック協力委員会」を「催事委員会」として常設化させて構想立案を進めていくことが決定した<sup>29)</sup>。そして木村は並行して銀座通り歩道におけるアーケード整備構想の立案にも着手し、銀座通連合会の内部では銀座通りにおける大規模行事の開催と街路空間の整備に向けた議論があわせて行われるようになった。

アーケード構想は雨天時の来街者に対するサービス向上を目的として立案されたものであったが、常務理事会における議論では「場末趣味」「個性的な建物を隠す」との意見も出されたため、雨天時のみに使用する折りたたみ式アーケードとして立案していくことになった。そして 1966 年 5 月 10 日の常務理事会ではその方向性として「支柱は建物側のみにたてる」「規格は歩道の建物側半分までとする」「布製にして軽量化する」ことが決議され<sup>30)</sup>、10 月に実施された銀座通連合会会員に対するアンケート調査では有効回答 145 件のうち 122 件の賛成意見が寄せられた。しかし大成建設に依頼した設



Photo3 Ginza Street after construction in 1968. Telegraph poles and willows have been removed.  
(Owed by Ginza Street Association)

計図に基づく構想では工費が 2000 万円にものぼることが判明し、常務理事会における議論でも上記のような主張から合意形成が進まなかったため、この構想は正式に採択されず棚上げとなった。

その一方でそれまで停滞していた都電の廃止に向けた動きが東京都の内部で見られるようになった。都は自動車の増加に伴う走行スピードの低下や乗客の減少などの影響から都電の経営に関して大きな財政的問題を抱えるようになり、財政再建計画を策定する必要に迫られた。そして 1967 年 1 月の自治大臣からの立案承認を受けて都議会へ退出された計画には「外部環境の変化で大衆輸送機関としての役割を果たせなくなった都電は廃止する」ことが盛り込まれ、銀座通りを走行する都電銀座線が 1967 年度に廃止する系統として指定された<sup>31)</sup>。これを受けて銀座通連合会は 5 月に改めて都電の廃止を求める請願書を都知事・都議会・都交通局に提出した。この嘆願書は企画立案が進められていた「大銀座祭」の実行委員会において取りまとめられたものであり、銀座通りの街路空間のあり方に関する議論が大規模行事の構想と一体となって進められていたことがうかがえる。そこにはそれまでに訴えてきた交通上の問題に加えて「町の美観を損ねている」との文言が加えられ、7 月 4 日の常務理事会において廃止が正式に決定した場合には軌道撤去後の道路整備について国道工事事務所と協議を進めていくことが決議された<sup>32)</sup>。銀座通連合会としては都電の廃止を契機として銀座通りの大規模な改修につなげていきたいという意図があり、7 月 20 日に都議会で上記の再建計画が決議され銀座通りにおける都電の廃止が決定すると、8 月 4 日には国道工事事務所に対して「一般国道 15 号線(通称銀座通り)の歩道補修に関する陳情」を提出している。そしてこれに対し国道工事事務所が共同溝の新設を含む車道と歩道の全面改修を実施する方針であると回答したことで、戦前期から目標としてきた都電の廃止と電柱の撤去を同時に達成できる見通しがついた。

当初国道工事事務所は歩道の舗装をコンクリート平板によって実施すると表明していたが、これに対して銀座通連合会は都電の敷石に利用されている御影石を歩道の舗装に転用することを提案した。10 月 11 日に提出された陳情書には「御影石敷には多額の経費を要するやに伺っておりますが、当銀座積年の希望である御影石敷が実現いたしますことなら、本会に於て負担させて頂くと記された<sup>33)</sup>。都電の廃止後、敷石を含む軌道財産は東京都から建設省関東地方建設局長に譲渡されることになっており、国道工事事務所はこの提案を受け入れた。そして銀座通連合会がコンクリート舗装を実施した

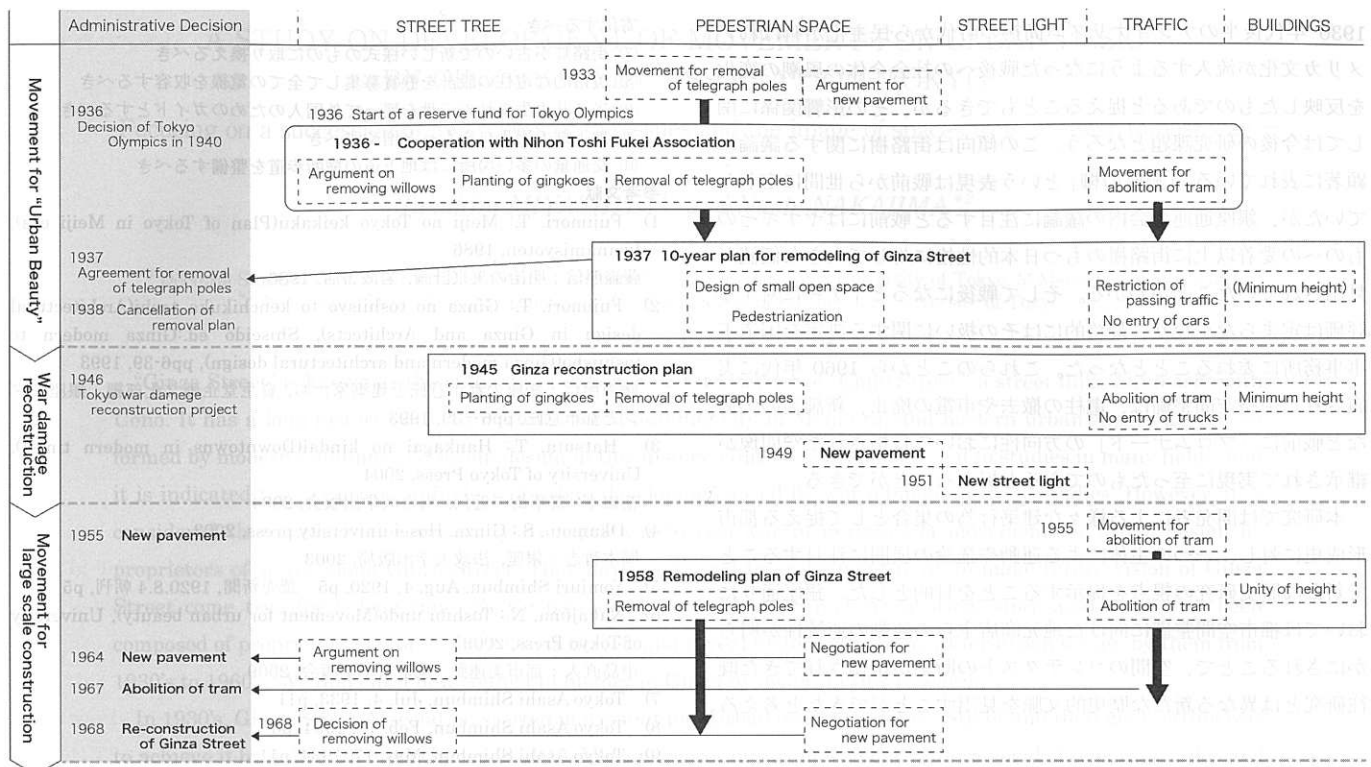


Fig. 1 The change of arguments for urban design in Ginza Street in history of movement by Ginza Street Association.

場合との差額である 5000 万円を負担することで合意し、同会が 4 年前に一度断念した御影石舗装が実現することとなった。

このように銀座通連合会は銀座通りの街路空間整備に向けて積極的な運動を展開し、行政当局に対しても強い意思表示を行ってきたが、その一方で街路樹の扱いに関しては明確な方針を有していなかった。当時の街路樹であったヤナギは排気ガスの影響などによって戦前期と同様生長状態が思わしくなく、銀座通りと直交する晴海通りのヤナギが 1964 年 2 月に地下鉄工事にあわせて撤去されたことを契機として、他の樹種へ変更するべきか否かという議論が生まれていた。維持管理が難しく年に 10 本程度を改植しなければならない状態で、会員に対するアンケート調査でも半数以上が撤去に賛成であったが、街路樹を所有する国道工事事務局が撤去に消極的であったことや会員の中に依然として反対意見も存在したことなどから結論は棚上げとなっていた。このような状況において常務理事会は 1967 年 8 月 1 日に銀座通りの改修を国道工事事務局に求めるための交渉材料として「街路樹と街路灯の処置を当局に一任する」ことを決定した<sup>34)</sup>。これを受けた国道工事事務局は改修工事期間におけるヤナギの撤去を決定し、1968 年 6 月には改修を機に街路樹を一新して低木であるシャリンバイを植樹する方針を銀座通連合会に伝えた。そして銀座通連合会の常務理事会はこの決定に対して「全面的に賛意を示す」ことを決議した<sup>35)</sup>ことで、1932 年の再植樹以来 36 年間銀座通りに植えられてきたヤナギは姿を消すこととなった。

銀座通りの改修工事は都電が廃止された 1967 年 12 月 9 日から実施され、1968 年 10 月 11 日より開催される「明治百年記念大銀座祭」までに歩道の拡幅、御影石による舗装、新しい街路樹の植栽、街路灯の新設、電柱の撤去、共同溝の整備などが行われた。そして大銀座祭では花自動車を使用したパレードや歩道にワゴン並べた

販売イベント「ワゴンセール」が実施された。当初警視庁は自動車の通行止めや歩道での商業行為を含むこれらのイベントの開催に難色を示していたが、電柱やヤナギの撤去、歩道の拡幅などによって生み出された銀座通りの新たな空間構成が、安全性の確保に関する大きな説得材料となった。

## 6. 結論 — 問題意識と空間像の継承に見る運動の連続性

本研究では銀座の地元商店主らによって構成される銀座通連合会が 1930 年代から 1960 年代にかけて取り組んだ都市空間整備に向けた運動の展開と、その中で共有された問題意識や空間像の変化を明らかにした。そしてその過程では Fig. 1 に見られるように 1930 年代の都市美運動において目指された電柱の撤去や路面電車の廃止などが戦後に再開された運動でも中心的課題として掲げられていたことがわかった。特に戦災によって沿道建築物の大半が焼失した状況で立案された復興計画においても戦前に議論されたテーマが盛り込まれていたことは注目に値する。1960 年代に実施された都電の廃止や銀座通りの大改修は東京都や建設省国道工事事務局によって行われた事業であったが、銀座通連合会の積極的な運動により彼らが長きにわたって共有してきた問題意識が強く反映される結果となった。

また共有される空間像として、戦前の都市美運動では欧米の都市を理想とする「プロムナード」としての方向性と、外国人をはじめとする来街者に対して日本的な印象を与えるべきとする「日本の銀座」という二つのイメージが存在した。しかし戦後になると、「日本の銀座」という視点は東京オリンピックや大銀座祭において変わらず見られたものの、街並み創出の手段として用いられることは少なくなり、空間整備に向けた運動において共有されるイメージは「プロムナード」としての方向性に集約されるようになった。これは

1930年代後半のナショナリズム高揚の時代から民主化が叫ばれアメリカ文化が流入するようになった戦後への社会全体の風潮の変化を反映したものであると捉えることもできるが、その影響関係に関しては今後の研究課題となろう。この傾向は街路樹に関する議論に顕著に表れている。「銀座の柳」という表現は戦前から世間に定着していたが、銀座通連合会内の議論に注目すると戦前にはヤナギそのものへの愛着以上に街路樹のもつ日本の性格に対して大きな価値が見出されていたことがわかる。そして戦後になるとヤナギに対する評価は定まらなくなり、最終的にはその扱いに関する決定を国道工事事務所に委ねることとなった。これらのことから1960年代に実施された街路空間整備は、電柱の撤去や市電の廃止、新舗装の実施など戦前に「プロムナード」の方向性において目指された空間像が継承されて実現に至ったものであると捉えることができる。

本研究では開発者による様々な建築行為の集合として捉える都市形成史に対し、一つの主体による運動や議論の展開に注目することで新たな歴史研究の視点を提示することを目的とした。銀座通りにおいては都市空間整備に向けた地元商店主らの運動の連続性が明らかにされることで、空間のコンテクストの断絶が指摘されてきた既往研究とは異なる新たな歴史的な文脈を見出すことができたと思われる。

## 謝辞

貴重な内部資料に接する機会をいただき、本研究への活用を認めてくださった銀座通連合会の皆様に心から感謝の意を表す。

## 注

注1) 銀座通りの現状と将来像に関する出席者の主張は主に以下の通り。

鈴木成之助（連合会相談役）

「現在の電車の取除き、之を純然たる車道として、両側に散歩道を設け車道と散歩道のあいだに花園を造る。」

門倉國輝（洋菓子メーカー・コロパン 創業者）

「何れにしても、電柱の歩道は餘り狭すぎますね。そして歩道に面して椅子、テーブル等を出して、和やかに一杯位やる様に・・・。」

大西五郎平（銀食器メーカー・大西錦綾堂 創業者）

「銀座は照明が煌々と輝いて、非常に綺麗たるといふことが現代人に好かれるのだと思ふ。だがニューヨークのタイムズ・スクエアに比べるとズツと劣りますね。」

注2) 座談会出席者の銀座通り沿道の建築物に対する認識は以下の通り。

泰利三郎（伊勢伊時計店）

「銀座を対外的に立派なものにしたいと考へてゐます。外國の大都市のイメージが即ち銀座があると言ふやうでは、心細いですからネ。盛んに西洋建築が建つてゐますが、私は一見して日本の銀座とうなづける様な銀座を作りたいと思ひます。」

玉木彌市（玉木商会・銀座通連合会相談役）

「私も國粹的な銀座には大賛成です。外國人が来てもどこの國だか解らない銀座では仕方がないと思ひます。一見して日本であるといふ印象を外人に與へ得る様な屋根とか塔をつければいいのです。」

注3) 都市美協会が発行していた雑誌『都市美』には協会が決議した事項が掲載されたが、市電に関する内容は見当たらない。しかし1936年10月8日に開催された座談会では都市美協会理事の林忠美が銀座通りにおける市電の廃止の必要性を主張している。（『都市美』No18, pp6-22, 1936）

注4) 報知新聞1936年11月25日夕刊によれば日本都市風景協会が行った提案は以下の通り。

① 建物が和洋折衷で統一感がなく、日本家屋は最も調和を破るものなので洋風建築に改めるべき

② 建物の高さが不揃いなので「本建築は4階建て以上」という最低高さを定めるべき

③ 建物の1階部分には必ずショーウィンドウを設けるべき

④ 「銀座の柳」は貧弱なので別の樹種に植え替えるべき

⑤ 歩道に自転車があふれ「歩道の物置」のような状況なので撤去すべき

⑥ 市電を廃止して銀座だけを走るスマートなバスを連合会でつくり市に

寄付するべき

⑦ 街路灯が古いので新しい様式のものに取り換えるべき

⑧ 美術的な電柱の設計を懸賞募集して全ての電線を収容するべき

⑨ アメリカ生まれの二世を雇って外国人のためのガイドとするべき

⑩ 地下鉄の出入口をもっと増やすべき

⑪ 交通量の多い場所には地下道の横断歩道を整備するべき

## 参考文献

- 1) Fujimori, T.: Meiji no Tokyo keikaku(Plan of Tokyo in Meiji era), Iwanamisyoten, 1986  
藤森照信：明治の東京計画，岩波書店，1986
- 2) Fujimori, T.: Ginza no toshiiso to kenchikuka tachi(Architectural design in Ginza and Architects), Shiseido ed.:Ginza modern to toshiiso(Ginza modern and architectural design), pp6-39, 1993  
藤森照信：銀座の都市意匠と建築家たち，資生堂企画文化部編：銀座モダンと都市意匠，pp6-39, 1993
- 3) Hatsuta, T.: Hankagai no kindai(Downtowns in modern times), University of Tokyo Press, 2004  
初田亨：繁華街の近代，東京大学出版会，2004
- 4) Okamoto, S.: Ginza, Hosei university press, 2003  
岡本哲志：銀座，法政大学出版局，2003
- 5) Yomiuri Shimbun, Aug. 4, 1920, p5 読売新聞，1920.8.4 朝刊，p5
- 6) Nakajima, N.: Toshihi undo(Movement for urban beauty), University of Tokyo Press, 2009  
中島直人：都市美運動，東京大学出版会，2009
- 7) Tokyo Asahi Shimbun, Jul. 4, 1933, p11
- 8) Tokyo Asahi Shimbun, Feb. 18, 1934, p3
- 9) Tokyo Asahi Shimbun, May. 17, 1934, p11
- 10) Yomiuri Shimbun, Sep. 9, 1936, p5
- 11) Tokyo Nichinichi Shimbun, Oct. 6, 1936, p5
- 12) Tokyo Nichinichi Shimbun, Oct. 18, 1936, p5
- 13) Tochinnai, Y.: Oshutoshi nimiru sanpodo no miryoku(Attractions of promenade in Europe), Yomiuri Shimbun, Nov. 7, 1931, p5  
椋内吉胤：欧州都市に見る散歩道の魅力，読売新聞1931.11.7朝刊，p5
- 14) Tokyo Nichinichi Shimbun, Dec. 20, 1936, p3
- 15) Tochinnai, Y.:Ginza no yanagi(Willows in Ginza), Kagakuzasshi, Vol.16, No.3, pp112 - 114, 1932  
椋内吉胤：銀座の柳，科学雑誌，Vol.16, No.3, pp112 - 114, 1932
- 16) Yomiuri Shimbun, Dec. 9, 1936,p7
- 17) Hochi Shimbun, Jun. 24, 1937, p12
- 18) Jiji Shinpo, Jan. 25, 1937, p5
- 19) Yomiuri Shimbun, Jun. 29, 1938, p7
- 20) Mainichi Shimbun, Dec. 12, 1945, p3
- 21) Asahi Shimbun, Jan.21, 1951, p3
- 22) Asahi Shimbun, Dec.15, 1955, p10
- 23) Yomiuri Shimbun, Sep.28, 1957, p10
- 24) Hosaka, K.:Ginza no kongo no arikata(State of Ginza in future), Toshio, No.149, p26, 1959  
保坂幸治：「銀座」の今後の在り方，東商，No.149, p26, 1959
- 25) Ginza Street Association et al.:Romen densya Ginzasen tekkyo nikansuru chinjo(A petition for abolition of Ginza Line), 1959,  
銀座通連合会他：路面電車銀座線移撤去に関する陳情，1959
- 26) Yomiuri Shimbun, Mar.18, 1961, p11
- 27) Ginza Street Association: Chinjosyo(A petition), 1963
- 28) Ginza Street Association Bull., Vol.2, No.1, p9, 1964
- 29) Ginza Street Association proc., Jan. 12, 1965, p2
- 30) Ginza Street Association proc., May. 10, 1966, p2
- 31) Sato, S.:Ginzadori no kaishu(Reconstruction of Ginza Street), Doro, No.329, p77-80, 1968  
佐藤秀一：銀座通りの改修，道路，No.329, p77-80, 1968
- 32) Ginza Street Association proc., Jul. 4, 1967, p1
- 33) Ginza Street Association:Kokdo15gosen no hodokaisyu nikansuru chinjo(A petition for reconstruction of Ginza Street), 1967
- 34) Ginza Street Association proc., Aug. 1, 1967, p1
- 35) Ginza Street Association proc., Jun. 27, 1968, p2



# A STUDY ON DEVELOPMENT OF MOVEMENT FOR URBAN DESIGN BY GINZA STREET ASSOCIATION, TOKYO

- Focusing on a succession of awareness of the issues and the image of spaces from pre-war to post-war -

*Takahiro MIYASHITA* \*<sup>1</sup> and *Naoto NAKAJIMA* \*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup> Doctoral Student, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, University of Tokyo, M.Media and Governance

\*<sup>2</sup> Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, University of Tokyo, Dr.Eng.

“Ginza Street” is known as the main street of Ginza and it is a part of “Chuo Street”: a street links Shinbashi with Ueno. It has a long history since Ginza brick-faced building city in Meiji era, and modern urban spaces have been formed by modern buildings and urban design in this history. Ginza has been subjected to studies in many fields, and it is indicated the extinction in history of urban developing caused by war damage in these studies. However, it is considered that there is the continuity from pre-war to post-war in purposes of movement for urban design by proprietors of stores along Ginza Street. They have continued to argue what to do to make future vision of Ginza Street come true for a long time. So we pay attention to Ginza Street Association: store association has been composed of proprietors of stores along Ginza Street, and reveal history of movement for urban design by them from 1930's to 1960's. We find out a new context of history in Ginza by means of this research.

In 1930's, Ginza Street Association started movement for “Urban beauty” of Ginza Street and their goal setting was to achieve it by Tokyo Olympic Games in 1940. Main purposes of this movement were removal of telegraph poles and abolition of tram, and they have appealed to city government. In 1936, Ginza Street Association developed movement with “Nihon Toshifukei Kyokai”, and they carried out a noise survey for abolition of tram. In 1937, they planned “10-year plan for remodeling of Ginza Street” as a long - term plan for urban beauty. However, this movement ended in failure as the society entered into the war regime after 1938.

In 1945, Ginza Street Association planned “Ginza reconstruction plan”. In this plan, purposes of movement in 1930's were succeeded though it was under the condition buildings had been burnt down by air raid. And it was also held up purposes of movement: removal of telegraph poles and abolition of tram in “Remodeling plan of Ginza Street” in 1958. They have repeated petitions to city government, and they have consulted with Tokyo National Highway Office for reconstruction of Ginza Street. As a result, they achieved removal of telegraph poles, abolition of tram and construction of new pavement in 1968. In parallel with this movement, they have planned a big scale festival in Ginza Street. They have continued arguments for Ginza Street as festive spaces, and it was held “Daiginza Matsuri” on reconstructed Ginza Street.

In conclusion, it became clear that there was the continuity from pre-war to post-war in purposes of movement for urban design. Especially, three themes: removal of telegraph poles, abolition of tram and new pavement have been found the value in each era. On the other hand, arguments about street trees haven't been decision clear directions in history of Ginza Street Association. From the above, it is considered that construction of Ginza Street in 1960's had a value as the ultimate goal of movement for a long time from pre-war.

(2017年7月9日原稿受理, 2017年10月24日採用決定)